

東邦大学学術リポジトリ

Toho University Academic Repository

タイトル	小児外科と私
別タイトル	Pediatric Surgery and Me
作成者（著者）	黒岩, 実
公開者	東邦大学医学会
発行日	2021.06.01
ISSN	00408670
掲載情報	東邦医学会雑誌. 68(2). p.32-35.
資料種別	学術雑誌論文
内容記述	最終講義
著者版フラグ	publisher
JaLCOI	info:doi/10.14994/tohoigaku.2021_031
メタデータのURL	https://mylibrary.toho-u.ac.jp/webopac/TD21238150

小児外科と私

黒岩 実

東邦大学医療センター大森病院小児外科

要約：学生時代に小児外科を志した私が、小児外科医となりじきに37年が過ぎようとしている。小児外科医人生の2/3を一施設（群馬県立小児医療センター）で過ごしてきたが、節目毎に恩師と呼ぶべき複数の先生方が存在する。いずれの先生方も学問に情熱を傾け、病めることも達のためにより良い治療を模索し続け一生を捧げてきた敬愛すべき先生である。一人目の先生は寡黙で何事にも厳しい先生であったが、基本的な（外科）医師としての態度や考え方を教えられ、2番目の恩師の生きざまからは研究の重要性と論文執筆の大切さと楽しさに気付かされた。残念ながらこのお二人には私の東邦大学への赴任の知らせを伝えることはできなかった。さて、最後の恩師は外科医ではなかったが、慣れない大学での私を多方面から支えて下さり、小児外科を盛り立てて頂いた。現役生活の最後が近づき、今更ながらこれら恩師の先生方との出会い故に今の自分があるのだと思う。

東邦医学会誌 68(2) : 32-35, 2021

索引用語：小児外科，環太平洋小児外科学会（PAPS），神経芽腫

65歳となり早2カ月が経過した……時は驚くほど早く過ぎ去り本年3月をもってお世話になった東邦大学医療センター大森病院を去ることになる。私は学生時代に小児外科を志し、卒業後は故郷の群馬県で小児外科診療を行う唯一の施設である群馬大学附属病院第一外科に入局した。以後は初期の4年間を除き、約37年間小児外科に従事してきた。

私のこれまでの人生を振り返ってみると複数の恩師といえる先生がいる。世俗的には恩師といえ一人であるのが通例であるが……敢えて複数名とさせて頂く。節目節目で敬愛すべき先生に出会い、その出会いと沢山の経験が私のその後の人生に大きな影響を与え医師としてのお手本となった。これら敬愛すべき先生方とのエピソードを交えながら私の小児外科人生を3期に大別して振り返り、東邦大学への感謝の念を表わすとともに後進の小児外科医の先生方へのエールとしたい。

学生時代

東京の某私立医科大学に入学し、専門過程（当時はこのように言った）2年（4学年）になる頃には漠然と外科系

医師になろうと考えていた。その後、各診療科を実習で回るうちに形成外科と小児外科に進みたいと考えるようになった。形成外科は魅力的ではあったが全身管理ができないし、成人の消化器外科では市中病院でも多数の患者が治療されているので、もっと専門性が高く一般の病院では行っていない診療科なら失職する事はないし、やり甲斐もあると考え、小児外科を志すと記憶している。母校も小児外科を標榜していたが、長男である私はその後の事も考えて故郷の群馬に戻ることにした。1980年（昭和55年）3月に大学を卒業し、5月には国家試験を通過した知らせを貰った。

医師時代

第一期（1980年6月～1994年3月）

1980年6月より群馬大学第一外科において小児外科医の一步を踏み出した。当時の小児外科の長は松山四郎先生（故人）であった。助教授（現在の准教授）であったが、その博学さは小児外科のみならず（松山先生は昭和40年代の中頃より小児を専門領域とするようになった）、成人外科の先生方の間でも知られており、冗談交じりに教授が

“やっかむ”位であるという類いの話を何回も聞いたことを記憶している。松山先生は博学であることに加え、手術の手腕が優れていることでも有名であった。しかしながら入局したての研修医が助教授と直接的に話すことはなく、対面で先生と接する機会はほとんどなかった。2年目以降、私は関連病院に出向して外科認定医（当時の呼称）を取るための研修に入り、4年目までは小児外科とはほぼ無縁の状態であった。当時の全国的機運に乗じて群馬においても1982年に群馬県立小児医療センター（GCMC）が開設され、松山先生は副院長として移られた。私も外科認定医資格獲得のための4年間を終え、5年目（1984年）より、GCMCにて研修医として勤務を開始した。大学と異なり常勤4名、研修医2名、計6名の小さな所帯である。当然人間関係は深化し会話や議論を通して先生の人となりが見えてきた。大学時代に先輩医師から聞いていた様に、世俗的な話や余談は決して言わない寡黙で厳しい先生であった。一方、学門に関する事には極めて寛容で手術法や医療機器の進歩にも関心が深く、私の学位取得のためにGCMC基本方針にも関わらず研究時間をとることを許可して頂いたことは今でも感謝している。松山先生が手術を執刀されることは稀であったが、その数少ない機会において見せた手術手技は確実・丁寧で、合併症の少ないことが印象的であった。患者管理においては少々議論はあっても、重大な副作用がない治療法は積極的に実行評価して継続の是非を決めることを勧めたが、これは現在でも私の中でも生きている。しかし、古き時代の外科の特徴？かも知れないが、病棟納涼会や忘年会などで世俗的な話はしない先生の隣席に座ろうものなら何を話したら良いのか大変苦労した。話しても会話が続き緊張するのみで宴会本来の楽しさを全く味わえずに宴が終了することになる。この緊張感に関しては上級医の先生も同様な話をしていたので、新米小児外科医の私のみが抱いた印象ではないんだと思ったことが回想される。

また、卒後7年目より友人に誘われるままに医療短期部の生化学教室に出入りするようになった。その教室では中野 稔先生を中心に当時脚光を浴びつつあった Superoxide radical (O_2^-) と脂質過酸化を研究の中心に据えていた。従来の O_2^- 測定法は複雑で労力のかかるものであったが、ウミホタル Luciferin 誘導体を用いた、より正確で簡便な化学発光による O_2^- 産生能の測定法の確立に日夜努力していた。私は友人らと共にその測定法の開発と、その後の白血病細胞や癌組織の Superoxide dismutase (SOD) の測定を行うこととなった。GCMCで臨床を行いながらの研究であったが、基礎教室ならではの忍耐強く研究する態度や得られた結果に関する執拗なまでの再現実験など、結果を世に発表する際の研究者の倫理観を目の当たりにすることができ大変勉強になった。

第二期（1996年4月～2010年8月）

1996年4月、松山先生の後任として東京大学小児外科教授である土田嘉昭先生（故人）が第3代院長として赴任された。群馬大学関連でない初めての院長であった。土田先生は小児固形悪性腫瘍や先天性胆道拡張症、胆道閉鎖症などでは極めて多数の業績を発表され、特に神経芽腫の分野では世界的権威者のお一人で、ヌードマウスを用いた基礎実験から我が国における進行神経芽腫治療プロトコルを確立し、まさに日本小児外科学会における重鎮でもあった。赴任後には積極的に院内改革をされた。自主研究事業の立ち上げ、海外出張助成新設、そして外来診察室増築と新病棟建設・診療科増設などである。小児外科領域の高名な海外の先生方をGCMCにお招きし、講演会や食事を積極的に企画された。群馬大学にも働きかけ、小児医療に拘わる教授の賛同を得て「群馬小児がん研究会」を立ち上げた。小児外科にあっては積極的な学会発表、特に海外での発表を強く推奨され、英文論文執筆の重要性を説くと同時に、群馬大学の動物実験施設への出入室許可を得て、ヌードマウスを用いた抗がん剤の感受性実験も開始され、着実に研究体制を構築していった。当時、小児外科は常勤5名＋研修医1名の6名体制で診療をしていた。常勤の下3名は1年違いであり、私は3人の真ん中であつた。年齢が接近していたため、競争心—良い意味での切磋琢磨する雰囲気—が生まれ診療や手術もさることながら、国際学会発表や論文作成に熱が入った。当時のGCMCの学術的業績の伸びには土田先生の貢献は大きかったが、他の先生の頑張りにも相当なものがあつた。土田先生が赴任して5年目には一つ年下の池田 均先生が獨協医科大学越谷病院（現、埼玉医療センター）の教授に内定し、2001年の春赴任した。GCMC主催の壮行会では県医師会長より“県立病院から教授がでるのは古今初めてのことである”とのお褒めの言葉を頂いた。私自身は土田先生が来てから国際学会にて頻りに発表するようになり、環太平洋小児外科学会（PAPS）、英国小児外科学会（BAPS）やアジア小児外科学会（AAPS）に参加する機会を得るようになった。また、土田先生の指導もあって英文論文の数も増えていった。深夜（23時頃）の我が家への電話が頻回となったのもこの頃である。多分、ご自宅（宿舎）に帰られてもあれやこれやと仕事や論文のことを考えて過ごされていたのであろう。しかし、この電話に家内は辟易してしまい、個人的には相当困惑することとなった。前述の松山先生と同様に、土田先生の学問に対する熱意は一貫しており、松山先生が築いた基礎の上に土田先生が種をまき、水をくれたのである。残念ながら土田先生はGCMCを退職し、群馬赤十字血液センター長として赴任後に、以前患った病の増悪により任期を全うすることなくお亡くなりになった。

第三期 (2010年9月～現在)

2010年の新年、PCのメール受診歴を開くと見慣れないメールが目についた。送り主は群馬大学小児科前講師の先生であった。メール内容は“面談を求めている先生がおり、概要を伝えるので電話が欲しい”とのことであった。早速、連絡を取ったところ面談希望者は東邦大学医療センター大森病院小児科の教授であるとのこと、この時初めて佐地 勉先生の名を聞くこととなった。その後の経過については割愛するが、縁あって同年9月1日付で東邦大学医療センター大森病院小児外科に赴任した。

私は研修医時代を除けば大学病院で修練を積んだことはなく、常に上司の先生がいて、その元で研鑽を積んできた。私にとって東邦大学は実に28年ぶりに働くことになる医育機関でもあり、初めての診療部門の長でもあった。赴任してみると指示、検査オーダーや手術申し込みなど、あらゆる点で小回りの利く小児病院と異なり相応の配慮と労力が要ると改めて認識し小児病院との違いを思い知らされた。医育機関としての多数のDutyもあり疲弊していた。佐地先生はことあるごとに声をかけて下さり、小児外科症例を増やすために小児科医にも号令をかけてくれたの

である。また、小児医療センターを構成する部門の教授や大橋、佐倉病院の教授を一同に集めての忘年会を企画し、縦割りの弊害を排除すべく親睦をいかに図るかに腐心されていた。佐地先生は誰にも気さくに接することができるお人柄で、かつ非常に機転の利く、気配りのできる先生であった。前述のお二人の先生と同様に勉学に非常に熱心であり、強い信念を内に秘めており、専門の小児の呼吸・循環疾患の領域でのご高名に加えその人脈も国内外に広く存在した。大森病院に併設されている小児医療センター長も兼任されており、センターに関わる小児科、新生児科、小児循環器外科、産科、小児腎センターおよび小児外科の発展に尽力された方でもある。残念ながら佐地先生も予期せぬ病魔のために故人となられた。教授職を離れ多忙さから解放され、更なるご指導をあおげると考えていた矢先であった。

恩師の先生方の写真は私のPCのデスクトップにある。時に開いて見る時間は、過ぎ去った時代をなつかしく思い出させてくれると同時に、今なお励まされていると思えるのである。現役生活の最後が近づき、今更ながらこれら恩師の先生方との出会い故に今の自分があるのだと思う。

Pediatric Surgery and Me

Minoru Kuroiwa

Division of Pediatric Surgery, Toho University Omori Medical Center

ABSTRACT: I aspired to be a pediatric surgeon when I was in medical college. It will soon be 37 years since I in fact became a pediatric surgeon. I have spent 2/3 of my career as a pediatric surgeon at a single facility (Gunma Children's Medical Center), but there have been several teachers, who I call mentors, at each milestone in my career. All of these teachers deserve respect for putting their heart and soul into teaching and devoting their lives to the continuing quest to find better treatments for sick children. My first mentor was a taciturn teacher who was strict about everything, but he taught me the basics of how to behave and think like a physician (surgeon). I became aware of the importance of research and the value and joy of writing papers (in English) from the way in which my second mentor lived. Unfortunately, I was unable to inform either of them of my posting to Toho University. My final mentor was not a surgeon, but he supported me in various ways at an unfamiliar university and he encouraged me into pediatric surgery. As I approach the end of my career, I believe that I am who I am because of the mentors I encountered.

J Med Soc Toho 68 (2): 32-35, 2021

KEYWORDS: Pediatric surgery, Pacific Association of Pediatric Surgeons (PAPS), Neuroblastoma